

人とトキが共生する豊かな地域環境をめざして

ひとも トキも

vol.
7
Aug
2012



人とトキが共生できる地域環境づくりプロジェクト



SPECIAL REPORT

08 洋県草バ村での有機梨栽培 モデル事業の現状について



- 02 エコツーリズム・モニターツアー
- 04 第2回訪日研修
- 08 関係者紹介
董寨探鳥ルートの探索
- 09 ラムサールCOP11
- 10 米田専門家帰国
「秦嶺の自然ギャラリー」
- 11 スタッフ・インターン紹介
- 12 Xi'an Cool

Cover Story



トキは繁殖期が終わった夏頃から秋にかけ、羽が生え換わる「換羽」をします。灰黒色に色付いた羽が抜け、全身が白くなってトキ色も映え、多くの方がイメージするトキの姿となります。一年の中でもっとも美しくなる時期とも言えるでしょう。(小池真実画)

エコツーリズム・モニターツアー

秦嶺山脈の自然と歴史を満喫するエコツアーの施行



2011年12月に実施した西安在住の日本人向け試行ツアーの第二弾として、7月上旬に、日本からの旅行者を対象にしたモニターツアーを実施しました。参加者は9名で、国立公園の保護や利用管理に長年関わり、エコツアーや自然体験には特に感度が高いシニアの方々です。西安に観光に来られた機会を利用して、プロジェクトからモニターをお願いしました。

一行は7月1日に西安着、翌2日は兵馬俑や大雁塔など西安周辺の定番ポイントをめぐり、3日から5日までの3泊4日で、トキの郷寧陝県、洋県と三国志の舞台、漢中を訪れました。モニターツアーとして実施したのはこの後半部分です。今回のねらいは、トキを始めとする地域の自然、文化資源を、自然志向ツーリストの目で評価してもらい、西安発のオプションツアーの可能性をさぐることです。

初日の3日は、まず秦嶺山脈の北麓、周至県楼観台にある陝西省希少野生動物保護繁殖センターへ。ここは、秦嶺

四宝と呼ばれるパンダ、キンシコウ、トキ、ターキンをはじめ、レッサーパンダ、ユキヒョウ、アジアクロクマなど秦嶺山脈に生息する国家級保護動物が飼育されています。一般参観も可能ですが、観光で来る人は少なく、パンダを始め、動物たちの表情もどこかゆったりとしています。園内に散在する飼育舎をゆっくり見て回りました。

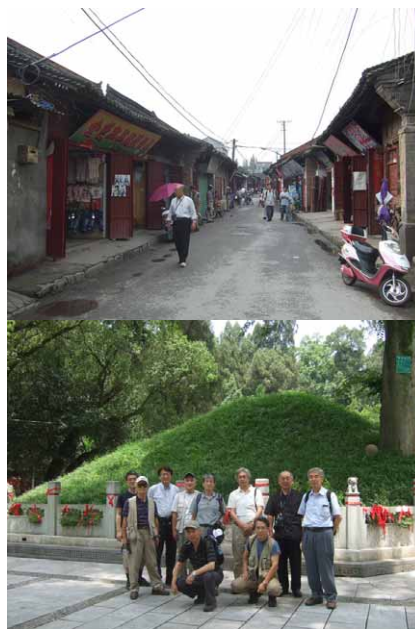
昼過ぎに楼観台を出発し、寧陝県へ。秦嶺のトンネルを抜けると土砂降りの雨。年に一、二度の大雨とのことで、寧陝市街を流れる長安河は増水で表情が一変していました。この日は秦嶺山脈の支脈、標高2300mの平河梁へのトレッキングも予定していたのですが、悪天候のため中止せざるを得ませんでした。

翌4日の朝は、トキ野生復帰基地のある寨溝村へ。小雨の中、村のメインストリートの小道を基地に向かい、歩きながら飼育員の馬蘭さんに今春の繁殖状況などを紹介してもらいました。結局、増水のため基地には近づけず、途中で引き返したのですが、帰り道、雨の中を2羽のトキが出現、一行の頭上を飛び去っていきました。思いがけないサプライズに皆さん大興奮でした。

寧陝県から昼過ぎに洋県に到着。昼食後、保護区のトキ飼養場を参観。その後、近くの草バ河の河原へ向かいます。小雨模様のコンディションでしたが、保護区の王宝玲さんのガイドで、畑や河原で餌を探すトキをじっくり観察することができました。農民のすぐ近くで餌を探すトキの様子は、特に参加者の印象に残ったようです。

洋県市街で歴史的街並みを散策したあと漢中市へ。夕食後は街に出て、夜店のにぎわいや中高年の大集団ダンスなど、漢中市民の日常生活を体感しました。

5日は歴史と文物がメイン。まず市内の古漢台博物館で、蜀棧道の解説やダム建設で移設された石門の碑文などを見た後、さらに西の勉県にある諸葛孔明の墓へ。メンバーは三国志に詳しい方が多く、ストーリーを思い浮かべながら参観されていたようです。帰りは



左上: 歴史的街並みが残る洋県の市街 / 左下: モニターツアーに参加した方々 / 右上: 農民や牛の近くで餌を探すトキを観察した洋県草バ村の川

高速道路で約5時間、夕方6時過ぎ西安に帰着しました。

参加者にアンケートを行い、今回のツアーを振り返ってもらいました。一番印象に残った場所としては、やはり野生トキを観察した寧陝県と洋県が多く挙げられていました。特に、寧陝県は悪天候だったにもかかわらず評価が高く、ポテンシャルの高さが分かりました。また、「農村の日常生活に触れられた」、「牛やトキ、サギなどが一体となった風景は、思っていたイメージ」と、トキだけでなく背景の農山村の暮らしや社会の姿も、参加者の興味を引き付けたようです。

自然と歴史文物のバランスについては、全員「ちょうどよい」。古漢台や諸葛孔明墓は「歴史の深さ」、「本物の魅力」と評価されていました。短時間だった洋県の古い町並み散策が高評価だったのは、新たな発見でした。そのほか、田舎の食堂での食事など、「中国の暮らしに触れる体験ができた」という声もありました。

今回のモニターツアーから、今後のエコツーリズム促進へのヒントがいくつか得られたように思います。一つは、地域全体の魅力を引き出すことです。今回参加者は自然志向のグループでしたが、トキだけでなく、他の鳥類、植物、地形・地質、また、歴史、文化、社会など幅広い対象に目を向けていました。メニュー作りでは、このような地域の持

つ様々な資源を総合的に組み合わせ、地域全体の魅力を引き出していくことが重要と思われます。

二つ目は、ガイドの重要性です。今回のツアーでは、プロジェクトの現地スタッフや保護区の職員に案内役をお願いしました。トキ保護から日常生活まで様々な分野の質問が続出し、答えるのは大変だったようですが、今の中国が良くわかったと好評でした。ツアーの満足度、また、地域裨益の観点からも、現地・現場の人による解説は、重要なポイントと思われます。

三つ目は、モデルコースの設定です。今回のツアーを通じて、中国の農山村の風景に魅力を感じている人が多いことがわかりました。里山歩きとトキ観察を組み合わせれば、魅力的なコースができそうです。特産品の販売、農家民宿といった展開も可能かもしれません。

四つ目は、ニーズの発掘です。今回ツアーの日程や宿泊、食事等の条件は、一般向けにはかなりハードかもしれません。しかし、今回のようなテーマ性のあるツアーは、学生のスタディツアー等ターゲットを絞ればニーズがあるのではないかと思います。どのようにして、マーケットを開拓していくのが、ビジネスとしての一番の検討課題と思われました。

今後のプロジェクト活動では、これらの点も念頭に置きながら、取組みを進めていきたいと考えています。

第2回訪日研修

有機農業や環境教育など各地の先進事例を学んだ研修



はじめに

7月17日から28日の12日間、プロジェクトのカウンターパート訪日研修が実施されました。研修員は、国家林業局対外プロジェクトセンターの孫念軍処長（女性）を団長に、バンディングセンター劉冬平助理研究員、河南省林業庁師永全副庁長、陝西省林業庁常秀雲調研員（女性）、および洋州政府蒙燕鈺副県長（女性）、漢中トキ自然保護区管理局王超副局長および董寨自然保護区管理局王科保護站長の計7名、うち幹部職員は4名、技術職員・研究者は3名です。このほか、プロジェクト西安事務所から森リーダーと索文娜アシスタントの2名が随行しました。

日程は、17日、北京から関西空港に到着、神戸市内のJICA関西センターでオリエンテーションを受けたあと、18日豊岡、22日佐渡、25日沖縄と移動し、28日那覇から上海に戻りました。

今回の研修の主なテーマは①保護増殖・野生復帰、②有機農業やエコツーリズム等の地域振興、③環境教育の3点です。

1. 豊岡市

コウノトリはトキと同様、水田の周りで人とともに生きてきた鳥類で、保護対策にも多くの共通点があります。昨年に引き続き、コウノトリの野生復帰に取り組む豊岡市を訪問しました。

まず最初に、兵庫県立コウノトリの郷公園と豊岡市コウノトリ文化館を訪問、郷公園の加藤主事から保護の歴史、野生復帰、環境教育等の取り組みについて

レクチャーしていただきました。研修員からは、人工巣塔、生残率、踏み荒らしなど多くの質問があり、活発な質疑が行われました。その後飼育ゾーンを視察、また、市北部にある保護増殖センターでは、人工巣塔で繁殖中の幼鳥を観察することができました。

コウノトリの生息環境整備の取り組みを学ぶため、コウノトリ飛来をきっかけに水田の土地改良を取りやめ、環境教育のフィールドとした「ハチゴロウの戸島湿地」や住民主導で湿地整備に取り組んでいる田結集落の湿地を訪れ、NPOや地域住民の皆さんと交流しました。円山川河口域一帯は7月3日、第11回ラムサール条約締約国会議で登録された直後で、ボランティアの皆さんが熱く歓迎してくれました。

地域づくりについては、御多忙の中、中貝市長から市環境経済戦略の策定などコウノトリとの共生を進める市のポリシーを紹介していただきました。トキとコウノトリは東アジアの宝、取組を心から応援したいとエールを頂き、研修員一同感激していました。市コウノトリ共生課や農林課からも「コウノトリ育む米作り」などのレクチャーを受けたあと、無農薬の田んぼを参観、栽培農家の根岸氏から無農薬への取組み経緯や販売状況などについてお話を伺いました。

豊岡での最終日は、日本海に面した山陰海岸国立公園の竹野スノーケルセンターを訪問、本庄館長や環境省の小谷さんから自然体験活動の取組みや国立公園管理についてレクチャー、その後、メンバー全員が海に入って、アメフ



a. 豊岡市で米の無農薬栽培に取り組む根岸氏の水田を見学 / b. 兵庫県立コウノトリの郷公園でコウノトリを観察 / c. 豊岡市コウノトリ文化館でコウノトリ保護について学習 / d. 佐渡市にて放鳥トキのモニタリングの様子を視察 / e. 佐渡市で米の無農薬栽培に取り組む齋藤氏の水田を見学 / f. 野鳥学習に取り組む喜如嘉小学校を訪問 / g. 団員全員でエコツアーを体験

ラシやカニなどを採集、海辺の生きもの観察プログラムを体験しました。

2. 佐渡市

佐渡は梅雨明けの青空が迎えてくれました。

まず最初に、フィールドでモニタリングの実施状況を参観、今春佐渡では34年ぶりに野外でのトキ繁殖が成功、その状況も含め、環境省長田首席自然保護官を始めとするモニタリングチームの皆さんに、現場を回りながら解説して頂きました。トキ保護センター・トキの森公園を参観後、野生復帰センターにて、佐渡における保護増殖や野生復帰の取組み状況のレクチャー、意見交換を行いました。

今回の研修は、中国と日本のトキ保護第一線の関係者が顔を合わせる良い機会であることから、トキ交流会館にて交流会を開催しました。洋県の蒙副県長、バンディングセンター劉助理研究員、および陝西省の常調研員が、それぞれ「洋県の有機農業施策」、「洋県における野生トキ保護」、「寧陝県におけるトキ野生復帰」について報告、また、日本側は新潟大学の関島先生が「エネルギー効率から見たトキの餌環境評価」、大脇先生が「行政担当者、住民、ボランティアのための養成講座の取組み」について報告を行いました。

意見交換や交流会では、日中双方で活発なやりとりが行われました。中国側の関心事項は、繁殖ペアの組ませ方、カラーマーカーやGPS送信器による繁殖への影響、放鳥後の給餌、苗踏み荒らしや糞害への補償など、日本側は、巢内の産卵数の測定方法、天敵防御訓練、農家の苦情への対処などでした。また、トキの渡り復活や佐渡におけるトキの採餌環境評価についても、活発なディスカッションが行われました。

地域づくりに関しては、減農薬・無農薬の「トキと暮らす郷」認証米の取組みや冬季湛水、水田魚道など「生きものを育む農法」について、佐渡市農林水産課からレクチャーを受けるとともに、無農薬栽培農家、斎藤氏の田んぼを参

観し、年ごとの田んぼの変化や栽培管理の苦労など、お話を伺いました。

今回、特に佐渡市のご厚意により、両津にて研修団の歓迎会を開催していただききました。行政、NPO、研究者、農家、ボランティアなど、佐渡でトキに関わる多くの方々と研修メンバーが交流する貴重な機会となりました。

3. 沖縄県

佐渡から一気に、真夏の陽射しが照りつける沖縄に移動、環境教育やエコツーリズム等の研修に取組みました。

まず、本島北部の大宜味村喜如嘉小学校を訪問、夏休み中でしたが、子ども達や先生方、父兄など多くの皆さんが歓迎してくれました。プロジェクト国内支援委員会メンバーの市田さんも参加。同小学校では、市田氏ご夫妻の指導により、20年あまりにわたって野鳥学習が継続され、ノグチゲラなど貴重な野鳥が生息する大宜味村での野鳥保護、環境保全意識向上に大きな成果を挙げています。

メンバーは、学校前の田んぼで子供たちと一緒に野鳥を観察、その後学校に戻って観察記録の整理、結果発表を参観、鳥類が専門の劉冬平助理研究員が代表して、「中国でもこの取組みを参考にしたい。皆さんにもぜひ中国に来てほしい。」とメッセージを伝えました。喜如嘉小学校訪問は、沖縄の地元紙やテレビでも紹介されました。

東海岸の慶佐次地区では、マングローブ観察ツアーを体験、団員二人一組でカヌーに乗って慶佐次川をさかのぼり、様々なマングローブ、カニやトビハゼなど干潟の生きものを観察しました。全員カヌーは初めてでしたが、海に飛び込む元気いっぱいの団員もいました。ツアー体験後、NPO法人やんばる自然塾の島袋代表から、同地区における住民主導のエコツアーの発展経緯や運営理念などについて話を伺いました。

中国でも、新たなタイプの観光として、「生態旅遊」という用語が普及していますが、今回の体験を通じて、研修員はエコツーリズムの具体的なイメージが

つかめたのではないかと思います。

やんばるから那覇への途中、読谷村の商工会とお菓子のポルシェ社直売店を訪問し、元商工会事務局長の上原さんや同社の澤岬社長から話を伺いました。地元特産の紅芋に着目し、商品開発を進め、沖縄を代表するブランド商品（紅芋たると）に育て上げた地場産品活用のモデル事例です。紅芋はプロジェクトサイトの洋県でも栽培されており、有機認証を取得した特産品の一つになっています。

最後の訪問地、那覇市では、ラムサール登録湿地漫湖の環境省漫湖水鳥湿地センターを訪問、環境省那覇事務所の坂口課長他のスタッフから、マングース駆除を中心とするヤンバルクイナの保護対策の取組み、マングローブ伐採など漫湖湿地の保全管理、又、水鳥湿地センターを拠点とした市民向けの環境教育活動について、レクチャーしていただきました。

まとめ

最終日の評価会では、多くの研修員から、日本の宣伝普及、環境教育の取組みを学ぶべきとの意見が出ていました。スノーケルセンターなど各参観地の展示解説施設における市民向けの活動や喜如嘉小学校の取組みは、強い印象を残したようです。また、トキモニタリングでの行政、研究機関、民間の情報共有、認証米や紅芋振興での行政と民間の連携体制等についても、学ぶべきとの意見が出ていました。

今回、研修員は各参観先で積極的に質問し、時間切れになることもしばしばでした。各研修員も手ごたえを感じていたようです。今回の成果が、これからプロジェクト活動や関連施策にどの程度反映され波及するのか、期待しつつフォローしていきたいと考えています。

最後に、今回の訪日研修に当たり、ご多忙にも関わらず、多大のご支援ご協力を頂きました関係機関や地域の皆様に、この場をお借りして改めて心より御礼申し上げます。

洋県草バ村での有機梨栽培モデル事業の現状について

トキ生息地での住民生活向上に向けた有機栽培モデル事業



野生トキが生息する洋県草バ村

はじめに

本プロジェクトでは、トキが生息する良好な生態環境を活かしつつ、住民生活の向上を図るためのモデル事業を各サイトで実施しています。今回は、洋県草バ村で実施中の有機梨栽培モデル事業の現状を紹介します。

トキの村 草バ村

草バ村は洋県市街地の北約3kmにある人口約1500人の村です。漢江に沿った平野部が丘陵と接するあたりに位置し、中央を草バ川が流れています。平地は水田、丘陵地は多くが梨園になっています。

草バ村は洋県の平野部で最初に野生トキが定着した村です。1996年以来、毎年営巣しており、2012年は2巣から合計4羽が巣立っています。草バ川の湿地や水田では、餌を採るトキの姿を良く見かけます。また、集落の裏の林は、秋から冬にかけてトキのねぐらに利用されています。近くには保護区管理局のトキ救護飼養センターもあり、洋県の中でも、トキとのつながりが特に深い村です。

トキ保護と住民生活の向上

洋県では、トキ生息地周辺での農業や化学肥料の使用が制限されていますが、それに伴う病虫害や収量減により、農家は減収を余儀なくされています。

近年、政府の補償金も支給されるようになりましたが、一部の補てんに留まっています。また、トキの数や生息範囲が拡大する中で、補償での対応には限界があり、農家の収入向上の新たな道を探り、支援していくことが、洋県のトキ保護の重要な課題となっています。

こうした中で洋県政府は、トキ保護によって形成された汚染の少ない良好な環境条件に着目し、2006年以降、有機農産品の生産・加工を戦略産業として位置付けた有機産業発展計画等を策定、国の有機認証の取得や有機関連企業・合作社への助成などの取組みを全県で進めています。

草バ村とナシ栽培

草バ村の主な作物は、コメ、トウモロコシ、ナシ、スイカ、およびその他野菜類等ですが、このうちナシは農家収入の約三分の一を占めています（コメは自家消費が中心）。草バ村のナシ栽培は1970年代に始まり、地元ではナシの産地として知られています。村の農家約150戸が参加するナシ専門合作社が組織され、有機ナシ栽培に積極的に取り組んでいます。

自然保護区管理局や草バ村の関係者との意見交換でもナシ栽培への要望が強く、住民生活向上には一番効果的と考えられたため、モデル事業としてナシ栽培支援に取り組むこととしました。

事業のねらい

草バ村の梨は、従来、在来の中・晩生種が主でしたが、近年、黄金梨、豊水などの早生優良品種への切り替えが進行中です。これら優良品種は市場での評価も高く、今後の主力として期待されていますが、有機で栽培するには、病虫害防除等の特別な栽培管理が必要です。しかし、これまで草バ村では、体系的な研修等の機会もなく、個々の農家が経験を頼りに取り組んでいるのが現状でした。

このため、モデル事業では、継続的な技術研修等により、農家の栽培管理の標準化及び水準向上を図ることを、当面の目標としています。また、最終的には、高品質ナシの安定的生産と高収益販売を通じて、村民の所得向上が実現することを目標とします。

事業の枠組み・実施状況

モデル事業は、プロジェクト西安事務所、トキ自然保護区管理局、及び草バ村の三者の協力枠組みを基本に、洋県政府や大学・研究機関等の専門家の協力も得つつ実施しています。対象は合作社の社員を中心とする草バ村のナシ農家です。

事業の中核的な活動は栽培管理技術研修で、講義中心の集中型研修と現場密着型の継続型研修の二本立てで実施しています。



a. 草バ村で栽培されている在来種のナシ / b. 栽培管理研修会(集中型研修) / c. 黄金梨 / d. 粘着シートや誘引灯による害虫防除法の現場研修(継続型研修) / e. メタンガス汚泥吸取り用の小型バキュームカー / f. 有機認証マークとトキブランドが入った黄金梨のパッケージ

初年度の2011年度は、集中型の研修を、6月中旬、10月下旬、2月下旬の3回、いずれも草バ村の会議室で開催しました。テーマは、剪定整枝、施肥と土づくり、病虫害防除等、ナシ有機栽培の特徴や技法、洋県政府の有機農業の取組み方針等で講義を中心に、袋かけ等の実習も実施しています。講師は地元大学の大学や研究機関、農業普及所等の専門家が担当し、スライド等で解説しましたが、毎回70～100名の参加者があり、村民の意欲が感じられました。

初年度の集中型研修で基本的な知識の普及は一定の成果があったため、2012年度は実際の栽培管理技術レベルを高めることに主眼を置き、現場での実習を基本に1年を通じて継続的に

研修会を開催する継続研修形式を導入することにしました。対象は村内の積極性が高い農家とし、実際のナシ園の状況に応じ、季節ごとの栽培管理の要点について実習中心の指導を行います。今後、草バ村の有機ナシ栽培をリードする先進農家を育成するのが狙いです。

指導は、漢中市の植物研究所に依頼し、高文所長をヘッドとする専門家チームが年間を通じて草バ村に通い、指導する体制としています。9月まで、ほぼ月1回程度のペースで、袋かけ、病虫害防除、夏季剪定、収穫前管理などのテーマの研修を進めてきており、毎回20人前後の農民が参加しており、地域に根差した土着の専門家が育ちつつあります。

なお、より幅広い農家を対象にした集中型研修についても引き続き開催を

予定しています。栽培だけでなく貯蔵や販売面も含めたテーマを検討中です。

研修活動と並行して、合作社に対し機材・資材の提供も行っています。草バ村はメタンガス設備が普及しており、汚泥の有機肥料としての活用を図るため、小型バキュームカーを提供しました。そのほか、小型の耕運機や害虫誘引灯等の器材や有機肥料なども提供し、技術研修の成果の活用を促進しています。

また、プロジェクトによる取組みの見本としてモデル園として設定し、実地研修のフィールドとするほか、資機材も積極的にモデル梨園に投入し、村内への波及を図っています。

有機栽培に取り組んでいるモデル梨園



プロジェクト関係者紹介

寧陝県林業局トキ野生復帰基地 主任

李夏



朱衣暈晨光，鷺語破天曉。
疑似穹天境，誤入青山坳。

朱鷺に題す

朱い羽が朝日を浴びて
朱鷺の鳴き声が曙を告げる
まるで天国の風景が
この青い山里に現れているようだ

2007年の春より寧陝県でトキ野生復帰計画が開始され、トキ—この絶滅危惧種の保護活動の新たな1ページが開かれました。私は、この活動に携わっていることを大変光栄に思っています。

トキの放鳥が行われてきたこの5年間で、環境に順応することから始まり、現在の個体群の拡大に至るまで、トキにとっては苦難の道のりだったでしょう。そして私もトキとともに模索しながら一歩一歩トキへの理解を深めてきました。ある時はトキの生存状態を把握するために寧陝県南部の水田や河川を駆け回り、ある時は繁殖期のトキの安全を守るため、10時間以上木の下で観察したこともありました。また、ヒナが殻を破

りその羽毛に包まれた姿を現した時には歓喜し、幼いヒナが命を落とした時には、深い悲しみに暮れてきました。

こうして保護活動が進むほどに、地域の経済発展とトキ保護の矛盾、そして農家の生産とトキの生息地の矛盾も日増しに顕著になってきましたが、2010年9月に始動した中日合作「人とトキが共生できる地域環境づくりプロジェクト」によって、こうした矛盾や衝突が緩和・解決され、人とトキが共生する環境が構築されることでしょう。

私たちが努力することで、青々とした自然の中にトキが飛び交い、吉祥と平安をもたらしてくれる日が来ると私は信じています。



董寨探鳥ルートへの探索

バードウォッチングのメッカとして知られている董寨自然保護区で、この保護区の目玉であるオナガキジの飼育場とこれから話題になっていくトキの飼育場を結ぶバードウォッチングコースを考えて、10年くらい前から使われていない山道を歩きました。昔は伐採した木を運び出すためのトラックが通ったと言うことですが、今は木や草が生い茂っていました。山中にはこうした昔のトラック道がいくつも残っているそうです。林は残念ながら原生林ではなく、樹齢10年～30年の雑木林や杉(コウヨウザン)の植林地ですが、ここではヤイロチョウやオナガキジがよく見られるとのことでした。



コウヨウザンの植林地の中を走るトラック道跡

ラムサールCOP11

ラムサール条約締約国会議に参加しました in ブカレスト



サイドイベントで発表する平野専門家



プロジェクト活動を絵で紹介し、好評を博したプレゼンテーション

ラムサール条約とは

ラムサール条約とは「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」という正式名称を持つ環境条約です。1971年イランのラムサールにて採択され、1980年に日本国内では発効しました。この条約は国際的に重要な湿原を登録し守っていくことを目的にしています。

締約国会議について

ラムサール条約の締約国会議は4年に1度開催されています。今年は7月6日にルーマニアの首都ブカレスト、国会宮殿にて盛大に開催されました（前回は2008年、韓国で開催）。世界各国の政府関係者やNGO、国際機関より約2000人が参加しました。日本や韓国、中国からも多数の参加があり、アジアのプレゼンスが非常に目立っていました。

日本国内で9か所が新たに登録

今回の会議では日本の9か所の湿原が登録され、日本国内の登録湿地はこれで46か所になりました。豊岡市をはじめとした関係自治体には認定証が授与されました。地方自治体の関係者や長年地元の湿原保全に努力されてきたNGOの人々の努力が実った瞬間でもありました。

今回、新たに登録された湿地は、大沼（北海道）、渡良瀬遊水地（茨城、栃木、群馬、埼玉）、立山弥陀ヶ原・大日平（富山）、中池見湿地（福井）、東海丘陵湧水湿地群（愛知）、円山川下流域・周辺水田（兵庫）、宮島（広島）、荒尾干潟（熊本）、与那覇湾（沖縄）です。

業務協力協定の署名

7日に行われたJICA分科会では、地球環境部の池田次長とラムサール条約事務局のアナダ・ティエガ事務局長との間にてMOC（業務協力協定）の署名式が行われました。署名式の後、JICA側は「条約事務局との連携により、JICA

が行っている途上国の湿地保全と持続可能な利用に向けた取り組みを一層改善させるとともに、その経験、知見を広く共有・発信することをより効果的に進めていきたいと」表明。また、ティエガ事務局長からは「途上国の現場の湿地保全活動に実績のあるJICAとの連携により、ラムサール条約が定める手続きにのっとり、湿地保全のための取り組みが実践されることへの期待する」との発言がありました。

水田とトキの関係について

私は7日に行われた2つの分科会でプロジェクト活動の紹介を行いました。英語での発表は久しぶりとあってかなり緊張しましたが、トキと水田との切っても切れない深い関係について、プロジェクト活動の紹介を取り入れながら、一般の方にも分かりやすい絵を用いて発表したところ、参加者から好評をいただきました。

今後も、当プロジェクトでは国際会議の場を積極的に活用し、国際広報にも力を入れて行きたいと思えます。

（平野専門家）

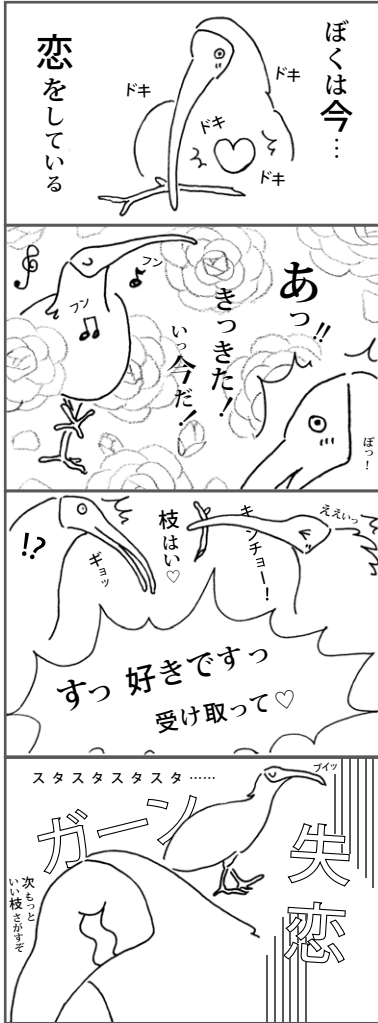


伝統的な建築物が残るブカレスト市内

ルーマニア

ブカレスト





トキは、仲の良い個体やペアの間で小枝などをくわえて渡す「枝渡し」を行うことが知られていますが、時には枝を受け取ってもらえないことも…

米田専門家帰国



中国の皆さま、2年間お世話になりました。西安で過ごした2年間で、いろいろな経験をさせていただきました。

鳥類専門家として派遣されていた米田専門家が9月で任期を終えました。今後も機会があれば中国を訪問し、鳥類保護の分野で貢献したいと語り、帰国の途に就きました。

米田専門家の思い出ランキング

第2位



劉冬平氏

一番最初の出会いは日本。約10年前、ズグロカモメの調査で会いました。その頃は大学院を出てすぐで、若々しく活動的な印象を受けました。当時から彼はトキの担当で、これまで精力的に仕事をされています。

第1位



トキ

2010年トキのねぐら調査で、夕方に100羽にもなるトキが乱舞した風景。夕日に映えたトキ色がとても美しく、感動的でした。

第3位



果物の美味しさ

西安では、たくさんの果物が非常に安価で楽しむことができました。露天の店一杯に並べられている果物は、まるで宝石箱のよう。特に冬のかんきつ類の多さ、夏の梨の種類多さに感動しました。

秦嶺の自然ギャラリー

Vol.2 ターキンの



ターキン 2012.9.24 11:27

秦嶺山脈の高海拔地では、ターキンたちが群れてのんびりとしている姿が見られます。温かい光を浴びているターキンが地面に寝そべて反芻したり、痒いところをかいたりしています。近くでは数匹の子どものターキンが遊んだり、角で突きあったりしています。突然、一匹のターキンが警戒音を発すると、みんながすぐに立ち上がり逃げますが、ある程度距離を置くと、また立ち止まって後を振り返ります。その可愛い様子を見ると、笑いたくなります。

実に秦嶺四宝の一つである彼らは“秦嶺ゴールデンターキン”です。国家一級重点保護動物と認定され、また地元の

人には“白い羊”とも呼ばれています。

ターキンは背が高いですが、その動作は器用です。好きな食べ物を見つけると、たとえ崖つぶちにあってもひざまずき体を前に出して食べます。もし高いところにあったときは、後足で立ち前足でへばりついて食べます。その可愛い姿は、典型的な「吃货」（穀潰し）ともいえます。

この秦嶺ゴールデンターキンは山奥で生息しているにもかかわらず、乱獲や環境悪化のため、一時は絶滅の危機に瀕していました。しかし幸運なことに、政府や各方面の協力により、現在ターキンの数は回復しつつあります。（孟曉敏）

始めまして、庄苗苗と申します。今年の6月に西安交通大学の大学院を卒業し、現在 JICA トキプロジェクト西安事務所です。業務の内容は主に通訳や資料の翻訳などですが、時には専門家とモデルサイトへ出張に行くこともあります。

古都西安へ憧れ、2006 年に来てから今年で7年目。恥ずかしながら、陝西省にトキが生息していることはプロジェクトに来てから初めて知りました。パンダと同じくトキが国家一級保護動物であることは知っていましたが、トキ保護についてはそれほど深く認識していませんでした。トキは、深山に住むパンダと異なり、里山保全の象徴でもあることを学びました。トキを保護するだけでなく、地域住民の生活向上や子ども達への環境教育などにも情熱を傾ける専

門家の姿を見るたびに心から感心し、自分も一生懸命頑張らないと、と感じています。

「東方宝石」とも呼ばれるトキは、縁起のよい鳥として人々に好まれていま

庄苗苗

プロジェクトスタッフ紹介



す。飛んでいるトキの姿は格別美しく、それを見た瞬間に本当に幸せな気持ちになります。ある出張の時には、車で移動中に突然1羽のトキが道の真ん中に飛んできて、大興奮しました。そのトキは車の前に止まってキョロキョロと周りを眺めていました。その悠々自適な姿から、私たちと車を全く気に留めていないことがよく分かりました。穏やかな村でのんびりと羽づくろいをしているトキの姿に、涙が出るほど感動しました。

人とトキが共生できる地域づくり、というまさにプロジェクトの目標ではないでしょうか。これを心の支えとして、未熟者ですがこれからもトキや地域住民のため、さらに日中友好のために、わずかながらも自分の力を捧げていきたいと思っています。



楊苗苗

インターン紹介

プロジェクトでは9月より、西安で日本語を学んでいる大学生2名のインターンシップを受け入れました。



孟曉敏

始めまして。私は楊苗苗ようびょうびょうと申します。陝西師範大学の4年生で、日本語を勉強しています。今、JICA トキプロジェクト西安事務所です。インターンシップをしています。

プロジェクトの専門家のおかげで、新しい知識、特に“東方宝石”と言われるトキのことをたくさん学びました。トキの状況なども徐々に分かってきて、とても勉強になりました。こんなに美しく珍しい鳥を見たら、誰もがトキのことを保護したくなるだろうと思います。

このプロジェクトではトキのことを保護するだけでなく、農村の公共施設や子ども達の教育などにも関心を持っていることを知り、とても感動しました。今はまだ日本語があまり上手ではありませんが、これからの2か月の間に、先生たちとともに、自分のできることを精いっぱいやりたいと思います。卒業後、どのような仕事をするかは決まっていますが、ここでのインターンシップ生活は絶対忘れません。

始めまして。私は陝西師範大学外国語学院日本語学科の4年生の孟曉敏と申します。今回は JICA トキプロジェクト西安事務所です。インターン活動をしています。

トキのことは小学校の自然授業の中で、国家一級重点保護動物でとてもきれいな鳥だと知りました。大学3年生の時には、プロジェクトの森チーフと平野専門家によるトキ保護に関する講義を受けました。今回のインターンでは専門家やスタッフのおかげで、トキだけでなく、ほかの希少動物に関する知識もいろいろと勉強することができ、心から感謝しています。自分はとても幸運だと思います。

私たちのインターン実習は主に資料の翻訳や収集などを行っています。専門家やスタッフと一緒にご飯を食べたり、日本語でコミュニケーションしています。プロジェクトの方々には優しく親切で、事務所はなごやかな雰囲気にも包まれ、私は毎日充実したインターン生活を送っています。

私たちの日本語にもいろいろと教えていただき、大変感謝しています。これからの2か月間、いろいろ勉強して精いっぱい頑張りたいと思います。どうぞよろしくお祈りします。

大雁塔

中国の都市の中で、西安は最も印象深い都市のひとつといえるでしょう。13王朝の洗礼を受けた西安では、さまざまな文化と繁栄が次々と現われました。世界四大古都の一つとして、西安はその名に恥じません。さらに、王朝の移り変わりによって、貴重な文化財産や観光名所が数多く残されました。例えば兵馬俑、城壁、大小雁塔、華清池などです。中でも、もっとも忘れ難いところが大雁塔です。

大雁塔は西安市の和平門の外にある大慈恩寺の境内に建てられています。かつては唐の高僧玄奘が仏典を翻訳する重要な場所でした。大雁塔は唐代における仏教関係の建築の特色が出ています。壮観で



調和がとれ、素朴で荘重です。大雁塔は7層で、64.5mもの高さがあります。塔の中には多くの文人の題字と書画が書かれ、最上階からは西安の全景を展望することができます。

大雁塔の魅力はこれだけではありません。大雁塔の足元には、アジアで最大の音楽噴水広場があります。夕方になると、千本ものとりどりの水柱が音楽に合わせて揺れ動くさまが見えます。人もたくさん集まってきて、本当ににぎやかです。その時の大雁塔は美しい水柱に映え、壮観な上に神秘的です。このような素晴らしいところに、心を寄せてみるのはいかがでしょうか。 (楊苗苗)

Xi'an Cool
X!9U.com 今ここにある西安

西北大学の留学生トキ情報コーナーを訪問!

大学卒業を前に、7月にプロジェクトのトキ情報コーナーを訪れた、西北大学4年生の新原 祐一 くん。

サッカーチームでの縁を通じて平野専門家からプロジェクトの活動を知り、トキを卒業論文のテーマにすることに決めました。トキに関する日中交流の歴史やODAについてJICA専門家から資料を入手したり、講義を受けるなどして卒業論文「朱鷺保護の重要性と日中友好への役割」を中国語にて執筆。西安での5年にわたる留学を終えて卒業し、日本へ帰国するとのことでした。



i トキ情報コーナーのご案内

西安事務室にはトキに関する情報を提供する「トキ情報コーナー」を設置しています。訪問されたい方は事前にご連絡ください。興味ある方のお越しをお待ちしております。

● 9:00 ~ 17:00

☞ 土曜・日曜・中国の祝日を除く毎日

人とトキが共生できる地域環境づくりプロジェクト

西安市蓮湖区労働南路296号民航大厦14F

TEL/FAX: +86-(0)29-88793312

<http://www.jica.go.jp/project/china/004>

日本側担当者: 平野貴寛

中国側担当者: 劉冬平



お断り

本誌は、プロジェクトの近況や情報を率直に読者に伝えることを目的としており、国際協力機構 (JICA) の意見を代表するものではありません。

本誌「ひととトキも」に関する皆さまのご意見、感想をお聞かせください。✉ toki.jica@hotmail.co.jp